



初夏の夕暮の縁日に、店をあげてゐる金魚屋だそうである。列べた平桶の水のおもての何んと涼しげなことか。そこへ金魚の眞紅の何んとくつきりと生きてゐることか。同じ水色の服に薄桃色のスカートは、美術家自身と察せられるが、目鼻なんか更めて附けないでも、金魚に見とれて立止つてゐる心もちは、はつきり出てゐる。又ゴム長に身づくろひながらも、買へどもいはずに自分の金魚を眺めてゐる金魚屋も涼しげである。さてその全景を横に貫く天びんぼうは、臆病な藝術家では、一寸眞似の出来ない大膽な手法でないか。それも當然、及川さんの感心しての報告によると、九時十分から十時十分まで、かつきり一時間も根氣をつめた大力作だつたそうである。

(倉橋生)